Principal Correspondence

「卒業について」

卒業にあたり，毎年同じような言葉を，卒業生に贈ります。
100 年近く前の英国のパブリック・スクール校長の卒業にあたっての言葉です（「自由と規律－イギリスの学校生活－」岩波新書，池田潔著より）。

日本では不吉なことを言うことを忌み嫌う伝統があり，例えば結婚式で「終わる，閉じる」などとは言わないのですが，西欧圏では結婚式で牧師が必ず「汝，健やかなる時も，病める時も，ともに手を携え助け合い・・・」とはっきりと危機を口にして覚悟をさせる伝統になっています。
（何でも英国が良いわけではありませんが）この 100 年前の言葉にはそうした英国の精神がはっきりと示されており，日本ではおそらくこういう祝辞はしないでしょうが，私は敢えて当校の精神と合致するゆえ卒業生に贈りたいと思います。
当時，女児は入学できなかった時代なので男児向けに贈られた言葉ですからそれを含んで読んでいただきたいのですが，これをもってマンスリーリリーベールの 1 年の締めくくりの言葉といたします。

この度，学窓を出る諸君が揃って立派な人間になることは理想であるが，
今日の社会ではまだそのような事は到底望めないかもしれない。
志を得るもの，然らざるもの，社会が諸君を遇する道は千差万別であろうが，
諸君の母校が諸君を遇する道は常に同じく，大臣，大将，僧正，社長，腰弁，
巡査，兵卒，郵便脚夫いずれの諸君をも喜び迎える校門の広さに差別は無い。
一つのクラスがそのまま社会の縮図である以上，あるいは諸君の中から刑法を犯した罪人がでるかも知れない。男らしく己の非を認めて，潔く規定の服罪を済ませた後は，彼とても母校は喜んで迎えるであろう。
ただ，その然らざるもの，罪を犯して逃れんとするもの，罪を他に転じて一人免れんとするものに対しては，母校の鉄門は永久に開かずの門であることを承知すべし。

「自立・創造・リーダーシップ」

みなさんは学校生活で，**リリーベールの精神**をしっかりと身に付けられました。期待を胸にそれぞれ全員の進学先が決まりました。ご両親や先生をはじめとする多くの人にいただいた「ご恩」や「愛情」は，大きくなったら今度はみなさんが社会にお返ししてください。

風よ，光よ，空翔る雲よ，この子らに祝福あれ・・・。
ご卒業おめでとうございます。

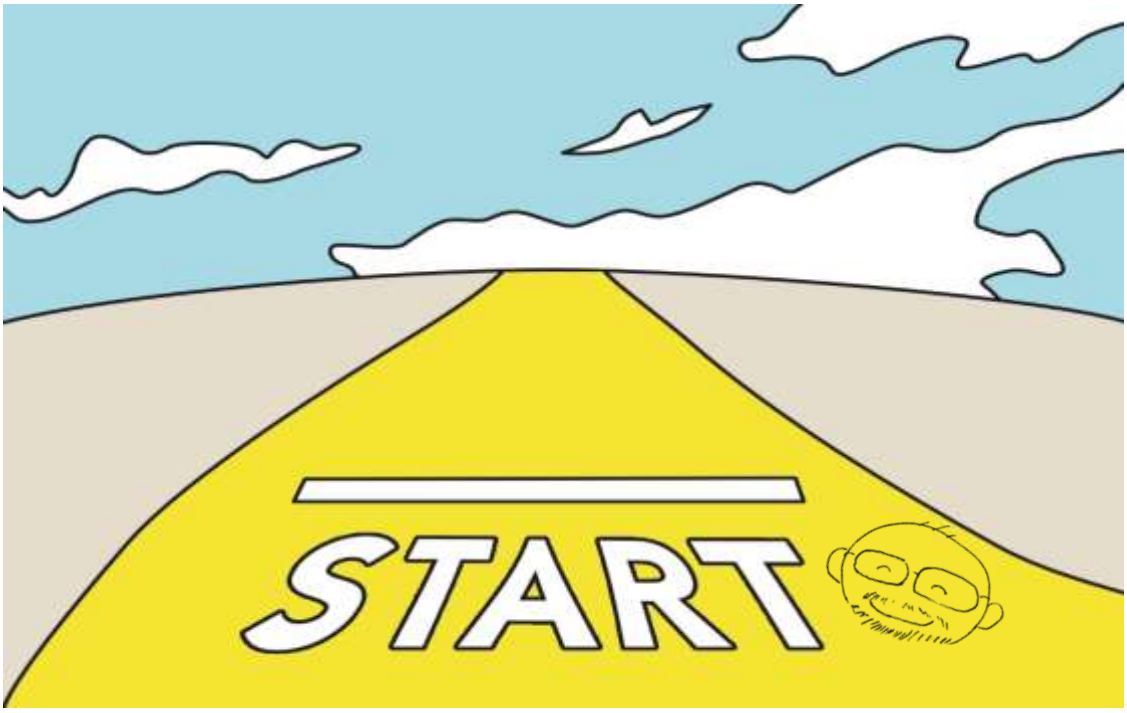
Principal Correspondence

「さようなら卒業生！この言葉を贈ります」

元キャノン電子の社長さんに聞いた話です。大学世界ランキング№1のハーバード大学で，ある実験調査がありました。

能力が同じくらいの学生を選び
①卒業して，私は「こういうことをしたい」という目標を持つ人 100 名。
②とりあえず社会に出て会社に入り，流れで能力を発揮したいという人 100 名。
それぞれを，30 年後まで追跡調査した研究があるというのです。アメリカらしいプラグマティックな研究ですが結果はなんと
①の，目標を明確に持っていたグループの 99 人が成功しており，
②の，目標が定まらなかったグループで成功していた人は 2 人だけでした。

この研究結果は，人は「何をやりたいのか？」とか「こういう風になりたい。」というような目標を持って生きることがとても重要であることを表しています。多分「こういうことをやりたい。」と目標を持つ人は，それが好きで，仕事での苦労も苦労と思わず，失敗しても何度でも挑戦し自分の可能性のために働くから，結果，成功するのでしょう。

そういう人はおそらく「自己肯定感」が高い人だと思います。すぐに困難にぶつかってあきらめるのではなく「努力を続ければ何とか必ず道は開ける」と信じている人です。「自己肯定感」は幼少期からの小さな成功を積み重ねることで醸成されるといわれます。がんばって「やったー!」という経験を積み重ね，周りから認められる体験が大事です。学校生活では，体育的活動が比較的自己肯定感を高めるのに良い活動といわれています。

年度末，今月でさよならをするお友達がいます。そんな季節になりました。わたしたちはいつまでも後ろ姿を見つづけていますよ。